國の海より見へヤル、尤國の奥に高山多くルへとも、海上よりは山は一向見へ不ヤル、右三つの堂は見へヤル、此堂を見當に仕り、船にも乘りヤル、此外山とヤもの近所には見不ヤル、

一、都より四十里川上に靈鷲山有之、山の高さ一里計り有り、はゞ八町長さ十六町有之よし、此處の大なる岩見へヤル、此岩山にて釋迦如來御説法被成ル、其岩の高き處に御座ル釋迦の御足跡あり、都よりリャウジュ山まで四十二里の間、毎年三月より四月末迄賣買の市立ヤル、天竺の八日市とは此事なり、是より四十三里川上にて、座禪石とて大岩あり、此岩の高さ三十二町有之よし、此岩はリウサ川の中へおゝひかゝり居ヤル、此岩の上にて諸佛座禪遊されルよしにて、則座禪岩とヤル、其邊ひかかりたる岩の上に、佛作の堂あり此内に座禪釋迦の尊形あり此座禪岩より二里川下は垣河川とヤし東へ流れヤル、此川の下の方を、カボウチヤとヤル、垣河川の長さ奥迄千二百三十里程御座ル、

一、リウサ川下より七十里川上に、大かひとヤ都あり、是迄唐船參りルへども、夫より川上へは御法度にて御通し不被成ル、小船は川上へ參り不ヤル、川下より川上迄の道法を考へヤものに尋ルへば、行戻り八年振りにて上下仕ルもの有之ルへども、彼の川上のタンドク山迄は不參よしヤル、奥への道のり夥敷遠き樣子にて御座ルよしヤル、

一、ちや屋、六コン、ヒツヒラとヤ處、都より八百里程未申へ參りルへば、シヤカタイとヤ、



所有之、此所より革類色々出ヤル、鮫抔も出ヤル、是迄マカタ國の内なり、是より未申の方に南蠻國有之、ツリトギス、戊亥の方にオランダ、イキリス、ヌイスクワンニヨロ、韃靼國へ付くなり、

一、靈鷲山の廻りに生へたる「たらやう」の木の葉（貝多羅葉）、毎年一車づゝ出ヤル、高砂（一本長崎）の十輪寺とヤ寺に有之ル「たらやう」の木葉は、佛御在世の時四ぼさつ御説法を御聞書を御弟子達被成ル文字御座ルとて、ヒヤタイの長老にヤ請參りル、是は私を雇ヤされル船頭前橋清兵衛旅宿の亭主木下六左衛門とヤ仁の妻女は、長老の妹にて御座ルゆへに、長老よりヤ請られしを一葉ヤ請、寺え上げヤル、此六左衛門は日本人にて三百石計り取りたる侍のよし、天竺にては帝王の御番衆にて御座ル、日本にて大納言の臣のよし承りル、

一、私天竺へ渡り始ヤルは、寛永三丙寅年十月十六日長崎福田を出船いたし、明る卯の三月三日に中天竺マカタ國リウサ川ハンテヒヤまで參り、日本へ歸朝の暇は、中年一年逗留仕ルて、三年目の辰の四月三日に、マカタ國リウサ川の川口を出船いたしル、其年の八月十一日に長崎へ着船仕ル、

一、天竺へ乘り渡りル角倉與市殿唐船の長さ廿九間横はゞ九間有之ル、船に乘りル人數三百九十七人乘り渡ヤル、

一、其後に參りゐ節はオランダヤヨウスとヤ人の唐船を借り乘渡ヤゐなり、ヤヨウスは長崎に屋敷有之、日本より知行千石以下、江戸にも屋敷有之、則ヤヨウスヤシキとヤ、江戸に御座ゐ、船頭はひとうと市左衛門とヤ、長崎のものにてゐ、オランダ船はさよ船とヤゐ人數三百八十四人乘り渡りヤゐ、此節は私生年十九歳にて、二十一歳の時歸朝仕ゐ右十九歳の時渡天は十一月十四日に長崎ふくだを出帆仕りゐ、明る二月十八日マカダ國へ參着、明八月十八日長崎へ着船ヤゐ、

一、はんりかせとヤは、南京ととんきんとの境目、ひやうのはなとはんりかせのはなと、毛拔合のはななり、此瀨の間十五里あり、此はんりかせの未じやか堂の口迄御座ゐ、但三千四百里ほど流れヤゐ瀨にて御座ゐ丑寅より未申へ流ヤ瀨なり、

一、まかた國の領内、しん羅モウルさんとめといふ處有之、都よりその間千里づゝあり、さんとめ迄は凡三千里あり、皮類織もの類色々の賣買もの出しヤゐ、此處は天竺の極々熱國故、四季共に往來仕ゐ人車に乘往來いたしゐ、自然車より落ゐへば、やけ付みいらに成ヤゐ、

一、まかた國にやしといふ菓物あり、日本にて大なるなしの如くなるものなり、そのやしを二つに割ゐへば、内に水四合程あるものなり、此水諸毒を消しヤゐ故、日本の人調法して藥に用ひヤゐ、やしの片々に米大方三合程入ヤゐ、是を升として銀一匁に付やしほの米六拾杯づゝ賣ヤゐ



銀一匁に付米一斗八升程づゝに當ヤゐ、

一、きやら山は中天竺ちや、ろくこんの、きやう山とヤて、此所より大分出ヤゐ、此外ルスンカボチヤよりも出ヤゐ、

一、まかた國にも伽羅山とヤ林御座ゐ、伽羅は八（一本三）月に切ゐへば、來年の三月頃迄に上のかわを去り、惡敷處をぢんまなはんと仕り、まん中のよき處をきやらとヤゐ、

一、珊瑚珠は、りうさ川の口、亦からか川の口に御座ゐ、又南京の都の口に大分有之ゐ由ヤゐ兎角川に有之ゐとの由承りゐ、

一、まかた國に松は無之ゐ、したん、こくたん、せんたんの木あり、此外に種々の植木とも御座ゐ、竹は大分御座ゐ、竹の心穴は殊の外細く漸々小指の太さ位ならでは入不ヤゐ、節の間は一尺計御座ゐ葛家などには、引物に遣ひヤゐ、

一、家作大かた三階作りに仕ゐ、四かい五かいも御座ゐ、熱國ゆへ地より高く床を張り、二階住居にして、床の下明け置ヤゐ、屋根は瓦ぶきこけらぶきも御座ゐ、壁はとう莚を表につけヤゐ冷る物用ひヤゐ、

一、人からは、日本より性が高くきれいに見ヤゐ、男は耳より下をすり、頭より上にかみを置ヤゐ、なんきん風の者、けし坊主風に見ヤゐ女は髪を其まゝきやらの油を用ひ、身にもきやらの

油をぬり、髪爪尋常に見えゃれ、髪はからわけに仕りれ、單もの、襦ばんの樣成ものを着し、前に折りたるをとつて、後へ下ケ、帶のやうにして、上にはあとゃて十徳の如く成もの着しゃれ、女の禮服にはかつぎかたびらを着ゃれ、

一、男は腰にヒットクとゃて、海部ほうてふのやうなる脇差を指しゃれ、

一、天冠とゃて、上下共に冠を着しゃれ、上官はいんすのやうらくをさげ、下々は眞鍮のやうらくをさげゃれ、

一惣て、出家は女人の通りたる道を其儘通り不ゃ、男出通りれを待受居ゃれゆへ、男道へ罷出て、ちやかといふて十念仕りれへば道を通り被ゃれ、ちやかとは釋迦とゃ事と承りれ、

一、俗人は、日本人と見ゃれへば、兩手を合せてちやかとゃておがみ殊の外敬ひゃれ、

一、食喰事は、キシカリイヤトは三ツイとゃれ、

一、三四月より六七月迄は、少し冷く御座れ、然れども日本のあつさより格別あつく御座れ、然れども八九月頃より三四月迄は夏季より格別に暑く御座れ、依て一日の内に二三度づゝ水をあびゃれ、

一、白銀は灰吹を遣ひゃれ、日本の白銀は、二割半引ゃれ、灰吹銀一匁又は一匁二分五りん如是限り、兩口に極印打ち、秤は入らず取やり仕れ、錢は日本の如くにつかひゃれ、



一、米は一年に二三度づゝ出來ゃれ、三月六月十月と三度出來ゃれ植付は春一度仕れ、後二度はひちの如く出來ゃれ、始と終に出來ゃ米は中米に成、六月出來れ米は上米にて納米に仕りれ六月三月十月共に、米の藁はとり不ゃれ苅捨しこきの如くに仕れ、穂はくひかりに仕りれてそのまゝ置ゃれへば、二番米おなじやうに出來ゃれ、俵は籐莚をかますにぬひ、一つに米四斗五升又は其餘も入ゃれ樣仕りれ、わらは無之れ、繩にも籐をへぎ繩になひゃれ、米わらの長さ一番に出來れは五尋二番に出來れは、四尋三番めは三尋程に出來ゃれ、麥粟稗は無之、大豆小豆は御座れ、

一、瓜茄子不斷多く御座れ、日本の風味同樣に御座れ、瓜は何も風味よく白瓜は無之れ、

一、けだもの類虎象獅子など多く御座れ、象は國主のぞう部屋拵置かひゃれ、象のつらに鉾を打立引廻水など飼ゃれ、象の面の、疵、星出ゃれへば、毎夜出次第に疵癒れ由ゃれ、大象は軍陣の時引並べ、井ろうを組上れよし、

一、牛は無之より、水牛御座れ處、百姓ども日本の牛のことく水牛をかひ入、車牛に遣ひゃれ馬は日本の馬より少し小ぶりに御座れ、猿無之れ、フントウとゃて、日本の山犬の如く成るものをあやしめゃれ、

一、じやかう犬は、鐵炮にて打ゃれ、其儘にてつぽに入埋置、後とり出し賣ゃれ、むさきもの

とて天竺の人嫌ひゃれ、じやかう犬によく似たるものに、ひほうとゃけだもの御座れ、是は何の用にも立ぬものゆへ捨ゃれ、是を日本にてひほうの死とゃれ、

一、リウサ川に鯉鮒鰐いろ〳〵の魚あり、じや多く御座れ、面は日本の牛の面らの大さ、尤角は無之れ、長さ七八間十三四間迄の有之れ、晝日和よき時分は、リウサ川の砂原へ上り、晝寐いたし、大いびきかきれものなり、處のもの、ながき棒を持、大勢行て、ねいりて居る處を棒にて跡先よりおさへ、直ぐに棒しばりにして、大勢ひ掛り荷ひ、生捕にして、里に出して切賣にして商ふなり、尤足四つ有之、鱗の大さ小判の大さ程有之、色は青く黑きものなり、日本より茂兵衛といふもの有之、此もの兩度渡天いたし、後の大船の時、あま龍の鱗二三枚、鼻紙に包み懐中して船に乘りれ處、リウサ川の川口にて、此船一向出不ゃれへば、船頭ゃは、此乘る衆の内に、雨龍の骨か鱗を持て乘たる人ありと見へてれ間、早々川へ御捨あるべし、左も無きにおゐては、縱へ何ケ月掛れても、船は出させ不ゃと斷れへば、誰もとらぬかれも懐中せぬかと爭ひ、朝乘りれて暮に及びれへども、船一圓出させざれば、彼の茂兵衛是非なく懐中より鱗三枚とも隱し捨れへば、さつそくさらりと船出ゃれよし、茂兵衛直咄し承りれ、ケ程に通力を得れ雨龍生捕となり、切賣にせらるゝ事、一圓不審はれがたくれ、リウサ川深さ眞中にては七十五尋、處に依り百尋計も有之由承りれ、



一、リウサ川にて水などあびれ子ども、簀をかけ置て内にて水あびゃれ、自然に雨龍に捕られれへば、ひやたいの長老を賴み、文字書てもらひ、川上より流しれへば、その蛇半死してせり上げゃれを捕りゃれよし承りれ、

一、リウサ川のじやに角の無之事は、釋迦如來御說法已後角落今に無之よしゃれ、

一、孔雀は家々に鷄の如く倒ひゃれ、糞は人に毒のよし、外の家へ捨ゃれ、ほうわう空を飛れへば、恐れて家内へにげ込みゃれ、ほうわう孔雀をとりゃれ由承りゃれ、

一、とび烏御座れ、烏は黑くは無之、殘らず白く御座れ、

一、天竺に山田仁左衛門とゃ人あり、しやむ一國の主なり、日本よりの　御朱印改め被ゃれ、此仁左衛門は、元來日本の伊勢山田の御師の手代にて、江戸廻りに武州え罷越し、彼地にて咎なる義有之よし吟味に逢ひ、長崎え缺落してシャムの出船に乘り、シャムへ渡り、國主に賴まれ、所々の軍に立て手がらをいたし、國主の聟となり、其後國主の跡を繼ぎ被ゃれよし、仁左衛門を、ヲヤコノソホンとゃれ、侍大將の事なり、位はラントウとゃれて、左大臣の由なり、

一、侍をばトアイ衆とゃ、またなんまんてうとゃ王帝の御はん被成れ、

一、其頃日本より積み參りれあきなひ物は、かや、から笠、扇、ぬりもの、あかゞね、鐵道具尤刀脇差望みゃれ、尤唯今は堅く御停止なり、多くは傘蚊張扇望みゃれ、日本の紙薄くして强

く有之故望やれ、

一、其頃天竺にて調參りれものは、糸、卷もの、藥種伽羅せんだん蘇木鮫など買れて積戻りやれ、

一、角倉與市殿船頭前橋清兵衛は、大坂鹽や道薫へ出入致されれ人にて、その時分大坂町中の大年寄は、はまや(一本淀屋)かうあん、大つかや(一本やなみ)しんさい鹽やどうい(一本道薫)にて御座れ私義は船頭清兵衛に頼まれれて、やとひにて天竺へわたりやれ、

一、角倉與市殿船に、かこ八十人參りれ、尤長崎はり南蠻オランダその外所々の海上案内功しやなる者を吟味いたし雇ひ參りれ、やとひ人數合三百十七人なり、水主の内役者小道具とやは

柱梶碇にかけれ者を極置れ、

たいあんとは　かぢ取役人の事　たあんとは　たほたつな役人の事

どうてんとは　いかりの役人の事　さほんとは　さうしき役人の事

あはんとは　柱へ能登るもの、事　一點、二點、三點とは　三繩三筋の役人の事

てつかうとは　船へ荷物を積役人の事　かきつけ　惣書役の事

天竺物の數量

一(コンカ)　二(アラス)　三(テレス)　四(クワトロ)　五(シング)　六(セイシ)　七(セイテ)　八(オイテ)　九(ノヒク)

十(テン)　百(テヘン)　千(テキ)　萬(レン又はハツチル)　(　)内は別本の分

物數の言ば如是、



中天竺の名

トンキン、カウチ、(達磨御誕生の地)　シャムハ、ルスン、カホウチヤ、ゑ五帝都

定海の御越候處は、ウリサラと申處、チイクワ山清涼寺にて御座候、

唐七帝の名

チャクチウ、ホクチウ、チンチウ、カウの國、カントウ、ナンキン、テンモウ、ゑ七都の名、

一、私儀始て天竺へ渡り申候時分、長崎御奉行竹中采女殿、

右者從長崎御奉行樣、天竺往來仕候儀御尋に付、覺申候通御物語申上候、

高砂船頭町　德兵衛

校訂者曰、德兵衛の渡天物語といふもの、寫本數種ありて一致せず、何れも增減あり、本編も數本を合せて增訂したれども、尙完全ならざるを憾む、又曰、此物語、荒誕不稽にして、捧腹に堪へざる紀事あれども、當時の、外國貿易の船舶商品等のことたけは、信を措くに足れり、亦悉く斥くべき文書に非ざるなり、

天竺德兵衛物語　終

# じやがたら文

寛永十三年に、邪宗門の制禁きびしく、葡萄牙國人の子孫の長崎に在りしを調査し、二百八十七人を阿媽港に遠流せらる。尤も父日本人にて母蠻人なるは子には構へなく、父蠻人にて母日本人なるは悉く放たれたり、或は父放たれて子は留り、或は子放たれて母と、まり、母放たれて子留る、兄行て弟留り、弟行て兄止る、夫妻相分れ、姉妹相離る、有樣、町々戸々の悲み、いかなるむくつけき荒夷も、袖しぼらぬは無かりしとぞ、

又同十六年に、紅毛人の種子も、日本に混すべからずとて、則平戸長崎に在りし紅毛血脈の十一人を、咬嚩吧に放流せられたり、じやがたらは今の爪哇島なり、紅毛船は、南蠻船と違ひ、交易を許され往來ありしかば、右の十一人の人々より、故郷の親しき者友たちなどへ文つかはし、送り物など品々ありし、中にも長崎何町の女人、父は紅毛人にて、母方のよしみあるが本に養はれ居たるに、此年十四歳なるを、咬嚩吧へ流されたり、此女顔かたちいと麗はしく、手習ひ常に草子など習ひてさかしき心ばへなりしが、かゝる所に放たれつゝ、何のゆかりも無き程にて、明くれ故郷へ歸らんことを、神に佛に祈りつゝ、年月を送りしか、かくて獨りありはてぬべきよすがなければ、命の露のよるべ求めて、もろこし人の妻となりてぞありける、年ごとに來る唐船に便してをこせし文、即ちこのじやがたら文なり、其念々東方を望みて故郷を戀ふる情、いと〳〵哀れなり、又、此女、人長けて後唐人に嫁して子などありて、日本へ度々文をこせたり、元錄九年の頃迄ながらへ七十六七才にて死せし由又其後子なるか文をこせしかど、公けより止めさせ給ひてのちは、いか、成り行きしか、

千はやふる神無月とよ、うらめしの嵐や、まだ宵月の空も心もうちくもり、時雨と共にふる里を、出し其日をかぎりとなし、又ふみもみじあし原の、浦路はるかにへだゝれど、かよう心のをくれぬば、

をもひやる、やまとの道のはるけきも、ゆめにまちかくこえぬ夜ぞなき、

御ゆかしさのまゝ、腰をれかき付たり、前業とは申ながら、かゝるうき世にかひなき命なからへ申さむよりは、たゞ世になき身となり候はゞ、いかにうれしからましを、たま〳〵花の世界に生れきて、此身となれるとし月をかぞふれば、十とせあまり四とせがほどとこそをぼへ候に、かくうらめしき遠き夷の島に流されつゝ、きのはけふとをもひながら、はや三とせの春もすぎ、けふは卯月朔日、まだ東雲に、あすは出船と人の聞えつるに、せめて筆の跡してもと

ぞんじ、なみだながら硯にむかひたる〳〵、いまだ夜ふかきほどにて、いたふくらければ、ともし火すご〳〵とかゝげつゝ、おもひ出ること共かきつたへるに、此文のうら山しくも、古郷にかへるよと思へば、我文ながら、ありしよりけにものかなしくて、

水くきのあとはなみだにかきくれて、むかしをいかに人の見ましや、

はづかしながら筆にまかせたる〳〵、そこもとよりの御文、ことに御いんしんとゞきまいらせね、まづ〳〵御つゝがなく御ざなされねよし、めでたくぞんじたる〳〵、さて〳〵そこもとの御文、くりかへし見たる〳〵へば、ひとしほ〳〵御なつかしさ、御すいもじなされくださるへくね、わか身はいまにつれなきいのちにて、ながらへゐたる〳〵、いつのとき日にか、日本を出たる〳〵や、いまはさだかにもわきまへがたふ、こなたのとし月にはおでらへがたく、たゞよるひるとなく、ふるさとのこと、つかのまもわすれやらず、をもひなぐさむひまも御ざなくね、たま〳〵故郷にて見申たるにおなしものとては、月日のひかりばかりこそ、そこもとにかはらずねゆへ、ひるは日の出るかたをながめ、夜るは月の出るかたを打ながめ、袖のかはくまも御ざなくね、かゝる憂世にながらへて、かへらぬむかしをこひしやとのみ、をもはんより、たゞ此世になき身ともがなとこそいのりまいらせね へ、さりながら、又うちかへし思ひかへせば、世をも人をもうらむべきにては御ざなくね、幾萬づの人か、此世にむまれきたる中に、我身いかなれば、異國



の人の子とむまれ出たる事も、前の世のむくひありてこそとをもひたる〳〵、しからば、今さら世をも人をもうらみ申ましき事にて御ざね、もにすむ蟲のわれからと、ねをこそなかめ、世をば恨みじと、二條の后もつらねさせ給ひしと、承はりねへば、いさゝか世をも人をも恨み申さず、われからとなくより外は御ざなくね、さりながら、此まゝにてはてなんとは存申さずね、たゞ一度神や佛の御あわれみにて、日本へ歸申へしとこそをもひたる〳〵、たとへ三日をすぐし侍らできへ果たる〳〵共、いさゝかくるしからずね、とかくすへは、日本の土となりねはんとぞんじたる〳〵、あはれ〳〵神や佛の御はからひにて、今一度御けんに入やたくねと、くれ〳〵念願にて御座ね、もしも又此世にて逢やさずねはゞ、わが身かねくやたるごとく、友だちは七世の契と承りたる〳〵へば、かならずく〳〵來世にてはめぐりあひやべくね、げにく〳〵御かたみの短尺、又おし鳥の羽など、かた時も身をはなしやさず持たる〳〵、必ずく〳〵來世にては、これをしるしにてめぐりあひやべくね、又ぞやわが身、花だんの花と仰せられて、御みせなされねこそ、しづこゝろなくきへかへりたる〳〵、此花のさかりには、そもじさまとこそながめたる〳〵に、かれく〳〵になりはて、ひとりながむる山ぶきの、とへどこたへぬ色なれば、そさまの花の袖の香に、おくれし夢の面影を、見ることだにもまぼろしに、あふはあふかはもろ共に、つゐに消なん露の身の、われや先だつ、人やおくるゝ、うらめしやありし世にだに戀しきを、めがれ

なく契る〳〵はで、今は何事も、皆あだごと、なりゆく、むかし語と成る〳〵事こそ、ふかきおもひのたねとあこがれる〳〵、あらこひしのそさまや、しのばしの友人や、ひとへ二重の色のみか、やへ山吹をおくり玉ふ、情のいろ〳〵ちはてずおもへとの、御心のうちとこそおしはかられる〳〵

山ぶきの花の千しほはかはるともいはぬいろをばわれわすれめや、

われらこゝの中、いさゝかはりなふ、くれ〳〵おもひる〳〵、

もろともに、うへてながめし山ぶきの、ちりても花のおもかげぞ見る、

なつかしやこひしや、古郷を出しは、いつの時日にやと思へば、袖のかはくまも御ざなくゝ、いやしき夷の島にすみる〳〵とても、御おもひすて下されまじくゝ、わがみの露は、秋の田の、穂のうへてらすいなづまの、光のまもわすれやさずゝ、折から雨風のそよぐにつけても、御なつかしさ、おぼしめしやられくださるべくゝ、あまり日本のこひしくて、やるかたなき折ふしは、あたりの海原をながめゝより外は御ざなくゝ、げにや古き歌に、大ぞらはこひしき人のかたみかはものをもふごとにながめこそすれと、讀し人までも、身のうへにおもひる〳〵、又すぎにし彌生三日の日、家の内の女ばう達、みな〳〵あそびに出られゝに、わが身もさそはれゝへ共、參やさずゝ、それにつけても、そのもとの御事共、おもひ出る〳〵、そもじ様へかやう



にわかれや事、かねてより存まいらせゝはゞ、よるひるとなく離れやさず、なれむつびゝばん物を、いつまでもと思ふものから、有のすさびにもてなし〳〵こと、今さら〳〵心にかゝりる〳〵、わするべき時しなければ、ぬば玉のよるはすがらにゆめに見えつゝと、古ことの葉におしはかり下さるべくゝ、細〳〵やゝ入たき事、濱の眞砂のかず〳〵にゝへ共、あまり〳〵心亂れ、あとさきわかちかねゝま、、あらましやゝる〳〵、助右衛門様九郎様、同じことにやゝる〳〵、又ぞやこうぜん町おかた様へ、文まいらせたくゝへ共、出船いそぎゝま、、そへ筆やゝる〳〵、おたつ様へやゝ入ゝ、何とて御文こま〴〵とあそばしくだされずゝや、心もとなく存る〳〵、かならず〳〵此舟のかへさには、御文くはしくあそばし下さるべくゝ、まことに我身居やゝ時とおぼしめし、きくを御見捨下されまじくゝ、かならず〳〵秋のころは、こま〴〵との御文まち入る〳〵、何ぞゐんしんやたくゝへども、めづらしき物も御ざなくゝま、、その儀なくゝ、心ざしばかりに、おび一すぢおくりしんじる〳〵、もはや日本のはななどは、みな〳〵わすれゝて、あらましおぼへゝものばかりぬいる〳〵、もし人の笑ひやゝはば、紿そらこととおほせ被下ゝ、又〳〵平吉様へやゝる〳〵、御無事のよしめでたくそんじゝ、ことに御文うれしくおもひる〳〵、しかれば、何とて毎年御文くだされずゝや、それのみふしんに思ひる〳〵、たとへそれがしかたへ文たまひゝはずとても、御心かはりとは存やさずゝ、かまひて〳〵此便には、御文こま〴〵

まち入る〳〵、かやうにやれも、せめて御筆の跡成共とぞんじ、ながめる〳〵はんま、こまぐ〳〵とわそばしくださるべくれ、あらむかしこひしや〳〵し、

一　おたつ様へやる〳〵、爰もとあつき國にてひゆへ、それより少持わたりる〳〵を、皆々つかひきりれま、、ひようぶきやう一かい、此便にたのみる〳〵、細〳〵やたくれへ共、筆にはつくしがたくれ、下のうばへもやる〳〵、すいぶん〳〵息才におはしれへ、わがみもやがて歸朝いたし、御げんもじにてやまいらせたくれ、あら日本こひしや、ゆかしや、なつかしや、見たやく、

一　松かさ　この手がしわのたね　杉のたね　はうきぐさのたね　御ゐんしんたのみる〳〵、かへす〳〵なみだにくれてかきる〳〵へば、しどろもどろにて、よめかねやつらまく、はや〳〵夏のむしたのみ入れ、我身事今までは、異國の衣しやう一日もいたしやさずれ、いこくにながされれとも、何しにあらゑびすとは、なれやべしや、あら日本戀しやゆかしや見たや〳〵〳〵、

じやがたら　はるより

日本にて　おたつさま　まいる

じやがたら文終



# 阿蘭陀文

大阪谷町の上小橋少々北え入處に、堀屋清兵衛とや者娘ふみとや女、同所小堀にて松重とや茶屋へ、年來奉公に遣し置れ處、文政三辰年長崎丸山へ仕替に相成、夫より阿蘭陀人フルテルユウとや者に夫婦の約束いたし、同八酉年九月廿二日の夜、長崎丸山遊女屋をにげ出し、阿蘭陀國へ無恙參り、夫婦に成、其後親里堀屋清兵衛方え、十八年ぶりにて送りれ文のうつし、

あまりとや、おんなつかしさのまゝ、文してや上る〳〵、まづ〳〵御機嫌よくいらせられ、御めでたくおんなつかしく存上る〳〵、さやうにれへば、私事、ふといたしたゑんにて、おらんだの人フルテルユウとや御方と、二世の約束いたし、文政八酉年九月廿二日の夜、長崎表より船にのり參りれ、おそろしき沖中へ參りれ處、しきりに御母様の御事思ひ出し、なつかしく、七日目にアグの西南松の木の間に見ゆるはふじ山の山とうげたまわり、見納めと存れは、かぎりなくなつかしく、いよ〳〵泣くらしれ得共、是非もなく、其日もくらし、其夜大風吹出し、廿日計晝夜となく船もはしりやれ、風も止みれま、、船屋ぐらとや所へ上り、四方を見渡れ得

ば、東南とゞ方に、一つ島見へゝま、、あれは何方と承りゝ得ば、イギリスとゞて日本の地を四百餘程はなれゝよしゞ聞、夫より船泊り、又々明方風吹出し、唐の北海とやらゞ所のよし、船走りゝ事三十日計、よふ〳〵風もやみおだやかになりゝま、、最早おらんだへ何程御座ゝやと尋ゝ得ば、二千里も有よし、我事因縁とはゞながらかよふなる遠くの人と縁を結ぶと思へば〳〵と我身の事をうらみ、又々泣くらしゝ、扨々不孝の罪のがれがたく、御母様にも唯々御うらみ被成と思ひわづらひゝ内、正月十三日とゞ日に、天竺のイハエとゞ處へ船を付て、其所は阿蘭陀船の問屋に御座ゝよし、ミヤキウとゞ家に久しく逗留いたしゝへば、其地の人々、日本人參りゝとて珍らしがり、五六里十里二十里先より私を見物に參りゝ、夫より又々船に乗、五月朔日やふ〳〵おらんだのケエケルとゞ處え船を付て、其國へ着いたしゝ、フルテルシとゞ家の名前に御座ゝ、何一つも不足なく暮しゝ樣子ゆへ先々落仕ゝ得共、たべもの粉がしのやふなるものを、常に給ゞゝ、五穀は少しもなく、私は日本の人なればとて、天竺より米を取寄給へさせてくれゝま、、少々も難義はなくゝ得共、只日本の事計思ひ出し、哀しく泣くらしゝま、、此方妹きのどくなるやうすにて、そうだんのうへ、五十坪計の田地を、日本のやふなる家をこしらへ、其内へ我母樣と妹の姿を、木像にこしらへ、日本に居ゝまねをして、内にて酒宴をいたし色々となぐさめくれゝま、、少しも不自由なく、家内むつまじく暮居ゝま、、先々御安心



願ゝ〳〵、夫より（子とも）出生いたし、最早當年七才になり、名をイリキンユとゞ、日本の咄いたし聞せゝ得ばシャモリンエとゞゝは、樣おば樣にあいたいとゞす事に御座ゝ、此方は、日本の畫七つ時分は、夜の明方に當よし私も夜明に成ゝ得ば、日本の事計思ひ出し、シャモリエと泣くらし居ゝ、私心がらとはゞながら、今更しよふもよふもなく、心の内御すいりふ被下、不便と思召可被下ゝ、長崎の友だちへも、文出し度ゝ得共、中々むづかしく、は、樣え文して、御樣子御尋上度存ゝ得共、格別の心安き人ならでは、一筆の文も願上ゝ事むづかしく、長崎通辭へ、まいないをいたし願上ゞさねば、私難義になり、其上夫とも御地へ參り、事むづかしく嚴しき事なり、夫故文も上不ゞゝ、此度ふとした便りにて、文して上ゝ〳〵、是まつたく神明樣天滿の天神樣、其外八百萬神の神々樣のいのりゝ〳〵、又々此方より、珍らしき品差上度ゝ得共、文さへむづかしく、格別の事さへ認めねば、たとへあらはれても格別の御とがめもあるまじく、よき折からと存ゝへ共、私の髮切さし上、是を私と思ひ被下ゝ樣願上ゝ〳〵ま、、其方樣より、御文被下度思召御座ゝはゞ、人を見立此方名、モウヤ、フルテルユウと御賴通じに上書御願被下ゝ、相屆ゞゝ、思へば〳〵不孝の罪、くれ〴〵もおそろしき義、重ね〴〵も御ゆるし被下、よく〳〵惡緣と御あきらめ被下ゝ樣願上ゝ〳〵、妹おてふ事、私とおてふも私替りに、御母樣へ孝行いたしくれゝ程、返す〴〵ねがい上ゝ〳〵、ゞ上度御事は海山に御座ゝへ共、筆

まわりかね、御めん被下まづ〳〵あら〳〵めでたくしるし、

フルテルユウ内

堀屋清兵衛様

ふみ事

御母様

アンナトヤす

おてう様

右は天保十四卯年正月公儀え書上に相成る寫

校訂者曰、親兄弟をすて、外邦に出奔するなどは、固より不孝の罪人なれども、其思郷の戀々たる衷情は、文詞の間に溢る、アマガハ文と共に、女性の一對音信と爲すべし、

# 漂流奇談全集 終

明治三十三年六月三十日印刷
明治三十三年七月三日發行

漂流奇談全集

定價壹圓五拾錢
改訂定價金五拾錢
金壹圓五拾錢

編輯者 石井民司
發行者 大橋新太郎 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 野村宗十郎 東京市京橋區築地三丁目十五番地
印刷所 株式會社 東京築地活版製造所 東京市京橋區築地二丁目十七番地

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

不許複製

# 續帝國文庫

毎月貳回發行全部五拾冊背皮金字本

正價（壹冊金六拾錢●六冊前金三圓五拾錢●拾貳冊前金六圓九拾錢●廿五冊前金拾三圓●全部五拾冊前金貳拾五圓●郵稅一冊拾六錢小包二百目迄

第壹編　校訂　眞田三代記　全壹冊

歷史的軍事小說中最も痛快淋漓悲壯激越なる者は眞田三代記なり彼の幸隆の義勇絶倫昌幸の智謀妙略或は幸村の誠忠而かも勇武奇計能く孤城を守るの邊躍々紙上に活動す一讀魂飛び再讀神駭かむ

附錄日本武士鑑は日本武士の沿革を詳叙せしもの蓋し一讀を要するものなり

第貳編　校訂　近世說美少年錄　全壹冊

是れ馬琴が想愈々老ひ筆益々熟する時代の傑作其脚色の粉糾錯綜して而て修理の整然一貫せる其文の豐艶潤澤にして而も章句の洗煉鋭利なる正に八犬傳巡島記等と併び稱せらるゝの一大雄篇今や續帝國文庫第貳編としてあらはる請ふ一本を購ふて其奇想妙文を味ひ給へ

第壹編　校訂　日本歌謠類聚　全壹冊

我國開闢以來二千五百年間の歌謠は載せて本書にあり時代を以て古今を分ち種類に依て雅俗を別にし一讀人をして昭々其沿革を詳にせしむ大和田先生が之を輯むるに幾星霜の苦勞を費されしかば曩に出でたる謠曲通解の一例に於ても推知するを得べし

第五編　校訂　偐紫田舍源氏　全壹冊

源氏物語の古雅なるを俗化し美文圈中一新機軸を開きたる柳亭種彦畢生の傑作今や源文の假名を漢字に改め丁寧反覆之れを校訂し以て續帝國文庫第五編とす其想の濃艶豐富なる其文の美にしてしかも解し易き正に小說中の上乘なるもの請ふ一本を購ふて書架を飾り給へ



第六編　竹田出雲　淨瑠璃集　全壹冊

目次

○七小町○三莊大夫五人嬢○加賀國篠原合戰○甲賀三郎窟物語○小栗判官車街道○男作五鴈金○雙蝶々曲輪日記○菖蒲前操弦孝○大塔宮曦鎧○右大將鎌倉實記○諸葛孔明鼎軍談○大內裏大友眞鳥○新薄雪物語○太平記菊水の卷

第七編　校訂　朝夷巡島記　全壹冊

朝夷巡島記は八犬傳弓張月と共に馬琴が三大著作の一なり而も其剛邁快活なる朝夷三郎を假て北條氏の奸曲を罵倒する處人をして壯絶快絶に堪ざらしむる者あるは斯書の特色たり綠陰淨窓三伏の讀物として之に過ぐる好書はなからむ

第八編　校訂　兒雷也豪傑譚　全壹冊

雄大の眞想豐富の脚色一箇兒雷也なる豪傑を默出し來り之れに配するに蝦蟇を以てし幻異奇異變化百出縱橫の行動殆ど端倪すべからず之れが作者は前後幾人の繼げるありて本一人の手より成るにあらざるも今や一編完結して條理井然脈絡貫通讀去りて拍案驚奇の價あり蓋し傳奇小說の巨擘なるもの請ふ受讀を給へ

第九編　江戸作者　淨瑠璃集　全壹冊

目次

○志賀敵討○糸櫻本町育○源氏大草紙○荒御靈新田神德○靈驗宮戸川○伊達競阿國戲場○石田詰將棋軍配○宇賀道者源氏鑑○裙重血紅跂○吉野靜人目千本○自來也物語○化競北滿鐘○鏡山舊錦

第拾編 校訂 前々太平記 全壹冊

人皇四十五代聖武天皇即位より六十代醍醐天皇の延喜年中に至る迄凡百七十餘年間の事蹟を錄するもの即ち前々太平記とし僧玄昉僧道鏡亂暴小野篁の詩才菅公時平の爭ひ等流麗の筆力縱横描き出して眞に活小記と成す而して醍醐天皇延喜七年より近衛天皇の治世に至る迄の間平將門反叛の始末源頼光が大江山酒呑童子退治の珍談八幡太郎奥州役等亦是れ當事の奇談を描き盡したるものを前太平記とす本書は此二書を合したるものなり

第十一編 校訂 太平記 全壹冊

北條氏の末路より足利の初に至り南北朝の事蹟記し盡して遺漏なく楠公父子の忠義は論者特に筆力を極めて寫し出す滔々數萬言流麗の文章自ら一大活小説を成す讀むで無限の趣味を感ずべし

第拾二編 校訂 紀海音淨瑠璃集 全壹冊

目次

○末廣十二段○殺生石八百屋お七○賴光新跡目論○傾城國性爺○花山院都巽○鎌倉三代記○神后皇后三韓責○吳越軍談○東山殿室町合戰○傾城無間鐘○小野小町都年玉○新百人一首○忠臣青祇刀○三井寺開帳○本朝五翠殿○曾我姿富士○甲陽軍談今樣粧○義經新高館○鎭西八郎唐土船○心中二ッ腹帶○玄宗皇帝蓬萊鶴

第拾三編 校訂 續近松淨瑠璃集 全壹冊

目次

○百日曾我○源氏烏帽子折○長者女腹切○蟬丸○用明天皇職人職○心中二人繪草紙○曾我扇八景○戀八卦柱暦○卯月の潤色○今宮心中○百合若大臣野守鑑○吉野都女楠○天神記○蛾歌加留多○曾我會稽山○本朝三國志○傾城島原蛙合戰○井筒業平河內通○女殺油地獄○信州川中島合戰○心中宵庚申



第拾四編 校訂 後太平記 全壹冊

太平記の後を承けて足利氏の末造應仁戰亂の時代を描き出す群雄四方に割據し天下亂れて麻の如く一仆一起小兒暗中に闘ふの幕はこゝに信長秀吉に賴て打破せらるゝの光景正に太陽東に出で百鬼影を藏すの處讀むで一大劇を觀るの思ひあり

第拾五編 近松半二淨瑠璃集 全壹冊

目次

○役行者大峯櫻○奥州安達原○山城國畜生塚○京羽二重娘氣質○蘭奢待新田系圖○小夜中山鐘由來○三日太平記○傾城阿波の鳴門○萩大名傾城敵討○東海道七里濱○道中龜山嘶○新版歌祭文○時代織室町錦繡○替唱歌糸の時雨

第拾七編 校訂 京山全集 全壹冊

目次

○腹佳話鸚鵡八藝○譽劔菱○復讐熊腹帶○女六部仇を宇津谷○小話娘楠樹○桃花流水○小櫻姫風月奇觀○早引說要集○江島御利生對菅笠○五人女都の紅紛筆○花嫁女敵討○高尾丸劔の稻妻○化粧坂懷忠龜鑑○奴勝山愛玉丹前○三國小女郎物語○隅田春藝者容氣○竹取物語○烟草十二抄○高尾考

第拾八編 校訂 落語全集 全壹冊

目次

○醒睡笑○鹿の卷筆○曾呂利語○曾呂利狂歌咄○臍の宿替○初音草大鑑○今歲花時○商賣百物語○輕口噺○咄の開帳○口拍子○落語笑吉茄登○輕口春の山○田舍莊子○壽々葉羅井○獨樂新話○かるくちばなし○河童の尻子玉○咄物語○輕口浮瓢簞○落噺六義

第拾九編　並木宗輔淨瑠璃集　全壹冊

目次
○道成寺現在蛇鱗○羽衣桑門筑紫噺○釜淵雙級巴○本朝檀特山○日蓮記兒硯○桶書噺○北條時賴記○那須與一西海硯○安部宗任松浦聲○丹生山田青海劔○後三年奥州軍記○攝津國長柄人柱○軍法富士見西行○一谷嫩軍記

第廿編　校訂紀行文集　全壹冊

目次
○東遊記○東遊記後編○西遊記○西遊記後編○日本行脚文集○筑紫紀行○諸國里人談○奥の細道

第廿壹編　校訂一九全集　全壹冊

目次
○三浦雛波復讐○新製交島巡○仙術獨稽古○木魚杜野狐復讐○舉家安全鼠山入○萬物小遣帳○松山稻荷御利生新話○錦故宗刀珍說○鼠姫○北島女教訓○忠信老媼餅○善惡附込當座帳○慾の川乘合噺○滑稽しつこなし○串談しつこなし○落咄彌次郎口○落咄見世びらき○福助噺○新吹○外五

## 續刊目次

第廿三編　校訂邯鄲諸國物語　近刊

第廿四編　校訂續紀行文集　近刊

第廿五編　校訂續水滸傳　近刊

第廿六編　校訂萬物滑稽合戰　近刊

第廿七編　校訂白縫物語　近刊



石井研堂君著　遠藤耕溪君畫

# 中濱萬次郎

全壹冊洋裝菊判百二十餘頁密畫挿入

▲正價金拾參錢　郵稅四錢

幼時荒礁の上に漂流し、捕鯨船に救はれ、文明國の教育を受け、世界を數周し、後歸朝して文明の鼓吹者と爲り、歐米遣使と爲り、冠を挂けて兒童の教育に意を專らにし、閑雲野鶴以て天年を終る者、是れ漂流萬次郎の一生と爲す。其境界の變幻多趣、宛も一部の小說也。著者の平易流暢なる筆を以て、其實驗を編述す、海國少年必讀の大冒險的讀本。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

森田思軒君譯

# 十五少年

全一冊洋裝菊判頗美本　正價金三十錢　郵稅六錢

▲日本新聞評……佛國ジユウールスヴエールヌの著、森田思軒氏の譯する所なり、我國の小說一般此種の者に乏し、かれお伽草紙の如きもなまめきたるもの多く、少年活潑の氣を養ふには似つかはしからざるなり、此著一種の四月險談實に男子の快讀に適す多とすべき也。

英國海軍大尉エム、リード氏著　櫻井鷗村君譯補（袖珍美本　日本三百餘頁）

# 勇壯少年冒險奇談　初航海

全壹冊洋裝正價金廿五錢郵稅金六錢

勇少年の冒險談として面白きこと此書の如きもの恐らくは天下になかるべし今や三版を出版せり

發賣元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

楠本男爵題辭末松男爵序文　西島良爾君著

實歷 清國一斑

全壹冊袖珍　正價廿五錢　郵税六錢

著者清國に遊學すること五年、吳越を跋渉し、江漢を上下し其風土人情細微を探究し、深く内勢の如何を視察し、蒐錄此一編をなす、今や東亞の風雲漸く急に、歐西列强の陸梁、日一日と其歩を進め、漸く死活の危機に瀕するは、清國の現狀なり。利害得失の關聯する處、本邦人士たらんもの、何人も其眞相を知らんと欲する所、此書能く老清帝國の實情を悉くして餘蘊なし、江湖の諸彦須らく一讀せずして可ならんや

鐵脚坊岩本千綱君著

暹羅老過安南　三國探檢實記

全壹冊洋裝　正價廿錢　郵税六錢

本書は岩本氏が暹羅國を出發して三國の内地を跋渉し其里程一千五百里此間幾百の危難に接し萬死を冒して風俗政敎商工等を觀察し來れる實記なり一たび本書を繙くものは萬感胸を衝き悲喜交も起る近來無比の珍書なり

慶應義塾々長鎌田榮吉君著

第四版

歐米漫遊雜記

全壹冊　洋裝四六版　紙數五百頁

▲正價金四拾五錢　郵税八錢

○歐米漫遊の一行○蘇格蘭フナス橋○伊太利セルトザの古刹○伊太利ヴエニス府ゴンドラ船寫影○葡萄牙シントラの城○埃及三角塔下寫影○北米ナイヤガラ瀧にて防濕服裝寫影○其他數葉

繪口

著者往年歐米に遊ぶこと年餘其歷程の廣汎なる、其觀察の細微なる他に其比を見ず、隨觀隨錄したるもの今之を一卷に收輯す、英米獨佛露伊其他各邦の文物典例國勢は勿論博物館美術館劇場著名なる建物舊趾名蹟等仔細に叙述して餘蘊なし、加ふるに著者が齎らせる珍奇なる寫眞十數葉を挿入す、最近歐米の旅行案内として必讀の新書なり。

東京市日本橋區本町三丁目

發兌元　博文館

299
I579h
(2)II

Ⓜ

022346000-7

２９９－Ｉ５７９ｈ（２）Ⅱ

漂流奇談全集（校訂）

石井　研堂／校

Ｍ３３

ADA-1007